

道博協 ニュース

第49号

発行所 北海道博物館協会
事務局 札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

博物館交流推進会議

各地で多彩に開催され

盛会裡に終了

平成六年度の北海道博物館

きました。

活動交流推進会議は、十一月十日の留萌市を皮切りに十二月二日の苫小牧市で開催された全道ブロック館長等会議に至るまで、四回にわたって多彩に開催され、無事終了致しました。そのいくつかは、本誌においても参加者から報告いただいています。ここで事業の概要を会員の皆様にお知らせ致します。

本事業は、道内博物館施設の相互援助と連携をはかるため、平成二年度から五ヶ年計画で、北海道が「北海道博物館等施設ネットワーク事業」の一環として進めてきたものです。

実施にあたっては、北海道開拓記念館が主催し、北海道博物館協会が共催者として、各地の教育委員会や博物館とともに事業の推進にあたって

きまかに、その方法を申しますと、道内を大きく四ブロック（道東・北網圏を含む、道北、道南、道央）に分け、館長等会議（一カ所）と学芸員等会議（三カ所）を開催しています。内容は「講演会」と「研究協議」の二種からなり、各地域の博物館がかかえている課題や博物館・園の連携、組織化について話し合われました。

平成元年度の本事業は、次のように開催されました。

- ① 道北ブロック学芸員等会議 十一月十、十一日、留萌市海のふるさと館、講演会 共通テーマ「西蝦夷地と北蝦夷地」(1)「記念館所蔵文書にみる近世の北海道」小林真人 道開拓記念館調査収集課長、(2)「西蝦夷地と場所請負」田島佳也神奈川大学短大部助教

授(3)「北蝦夷地と日露関係」秋月俊幸北海道大学講師 参加者三八名

② 道南ブロック学芸員等会議 十一月十七、十八日、江差町文化会館、講演会「北海道の植生」北海道大学農学部五十嵐恒雄教授、研究協議「博物館における自然学習のあり方」三野紀雄道開拓記念館企画調整課長、参加者二十三名

③ 道東ブロック学芸員等会議 十一月二十一日、二十二日、厚岸町海事記念館、講演会「国泰寺の経営について」

道開拓記念館矢島審主任学芸員、研究協議「歴史的建造物の地域的保存活動」態崎農夫 博厚岸町郷土館学芸員、北海道における歴史的建造物の保護行政と保存活動」小林孝二 道開拓記念館学芸員、参加者三十八名

④ 全道ブロック館長等会議 苫小牧市ニュー王子、講演会「考古学と博物館」明治大学大塚初重教授、研究協議「博物館における埋蔵文化財の問題について」平川善祥道開拓記念館学芸員、高橋正勝 江別市郷土資料館長、(参加者一〇八名)

中川 敏元会長

勲五等瑞宝章を受賞

元札幌市円山動物園園長で、第七代の北海道博物館協会長を昭和五十二年から六十二年まで十年間つとめられた中川敏氏は、平成六年度の秋の叙勲に際し、永年の社会教育の向上に貢献された功績により、勲五等瑞宝章を受与されました。当協会としまして心からお祝いを申し上げます。



平成六年度博物館活動交流推進会議

「全道ブロック館長等会議」参加記

標記の会議は平成六年十二月

月一、二日の両日に亘り苫小牧市にて開催された。

一日目の講演会は明治大学文学部教授の大塚初重氏による「考古学と博物館」と題する基調講演であった。

講演内容はいくつかの小テーマに分かれたものであったが、今後の博物館等の運営面において極めて示唆に富むものであった。講演内容を詳述することは紙数の都合もあって全てを網羅していないことも、必ずしも一致するものではないことを初めにお許し賜わりたい。

「考古学研究の状況変化」では、今日の博物館黎明期の展示物の一つとして考古資料の中から珍品あるいは優品を展示することが主流となっていたが、現在ではそうしたものは一部であって、むしろ、当時の人々の生活全体を明らかにする展示手法に移行して

きていると言われる。

それは近年実施されている大規模発掘（行政発掘が多い）によって当時の生活空間

である地域全体を調査することにより、全てが明らかになるようになってきていることが大きな要因の一つになっていると言っている。

また、こうした生活空間の調査では、かつて先土器、縄文、弥生、古墳の各時代を中心としていたが、近年では、むしろ、中世、近世、はては現代にまで拡大される方向にある。以前の調査では近・現代は考古学の対象外のように扱われたこともないわけではなかった。

この分野ではまだまだ不明な点も多く、調査によって新事実を明らかにしてくれることを江戸時代の大名家墓所の発掘例から詳述された。

また、考古学は考古学のみでの調査、研究で成立しているものではなく、他学問との



明治大学大塚初重教授講演会

連携、所謂、学際的な協力体制が必要で、考古資料を扱う学芸員はもと、余裕ある時間の中で研究を行ない、他学問分野の研究者とも交流を深めることが大切である。

「博物館の変化」では、外国の博物館における展示例から、ジオラマや関連資料そのものを見せるにしても、本物により近づけ、米館者の興味を一層高めるように工夫されているものが多い。また、米館者が展示物を通して体験しているような臨場感溢れるものとなっている。展示は時

代とともに変わるもので、これからは十年サイクルで展示替を試みないと米館者の興味や利用を高めることは難しくなる。展示替えについては経費的な問題が大きく施置者の姿勢に負うところが大きい。

まとめとしての「考古学と博物館の未来」では、大学等の専門機関では最先端の新しい学問の体系化あるいは技術革新等を実践し、得られた成果、情報を提供するところとしての研究が中心に行なわれるであろう。主に行政機関として位置付けられる地域博物館等施設では各種土木工事に伴う埋文発掘調査に忙殺される

ことが多いことも、考古学としての発掘調査が大規模に実施できる点において、過去に予想だにできなかった新事実を得ることも大いに期待することができると期待する。例えば、佐賀県吉野ヶ里遺跡、青森県三内丸山遺跡あるいは堺市出土の銭山遺跡など、これまでの研究成果や歴史観を変えてしまうほどのものを提供している。こう

したことから、今後、日本の考古学界において新しい大発見の可能性としては、行政発掘による大規模調査の中からもたらされるであろうと予測されている。

最後に、考古学資料そのものはそう変化することはないかも知れないが、それを取巻く環境は大きく変わっている。とりわけ、博物館等は生涯学習時代を迎えて以降、文部省・文化庁も学習機会提供の場として位置付けられていることから、近い将来この分野に注目せざるを得ないと考えられるので、内容充実が促進され、活気ある施設になって行くものと期待している」と結ばれた。

先生には大変ご多忙の中、ご米道賜わり、貴重なご講演をいただいたことに対しまして、参加者一同衷心より御礼申し上げますとともに、このようにな会議をご準備いただきました関係者に対しまして、深く感謝を申し上げます。と致します。

北網園北見文化センター館長 久保 勝範

平成六年度北海道博物館協会 学芸職員研修会に参加して

今回のテーマは「博物館のデータベースとネットワーク」という現在の情勢にあった興味深い内容であった。

一日目は、データベースの基礎理論の後、穂別町立博物館の具体的な事例発表があり、博物館資料のデータベース化や情報リレーションの必要性を痛感した。

昼食時には各企業のデモ機が展示され、情報処理の仕方や一般市民に利用できる様々なソフトウェアの説明を聞くことができた。

今やコンピュータによる情報処理は特技でもなければ特殊でない社会となっており、地方自治体の業務において欠くことのできない機器の一つであり、博物館においても例外ではない。



その理由として扱う資料の基礎的データが十分にできていないところにある。資料の受入年月日、寄贈者、名称程度であれば資料収集時にできないわけではないが、資料の洗

いわけではないが、資料の洗浄、登録、計測となると多くの作業過程が必要であり、追いつかない現実がある。また、職員体制が整備されていないことも致命的である。市においては複数学芸員制がみられるが町村では一名体制が大半

を占め、博物館活動の調査研究、資料の展示と保存、教育普及活動を均等に遂行することは不可能な状況なのである。

それらが解決された時に、ようやく資料のデータベース化により、資料の比較検討、貸借が容易となり、市民に対して多くの情報提供が可能となり得るだろうと考えているが、このような意見は私だけではないだろう。

二日目は、北海道開拓記念館の新展示を見ながら亀谷学芸員の説明を受けた。

二十年ぶりの常設展示改装ということで、現代的な展示各課の学芸員の意見取りまとめや展示、建設業者との日程調整などの並々ならぬ苦勞を知ることができ、また各展示の色々な工夫を知ることについて大いに参考となった。

数年ぶりに学芸職員研修会に参加して驚かされた事があった。それは学芸職員が八十二名も参加し、私が入会した昭和五十五年頃の四倍にもなっていたことです。さらに自然系を専門とする学芸員が

増大したことも気付いた点です。

ここ数年間に博物館に関心が向けられ、郷土史とともに地元の自然環境にも注意されはじめた結果と言えそうです。従前の学芸員は考古学を専攻している者が大半であり、埋蔵文化財の調査員と兼務していた傾向が濃厚だった。自然系を専門とする学芸員の台頭によって、本来のもつ博物館活動と行政発掘調査が分離される傾向も見られるようになってきたことは喜ばしい限りであり、博物館のイメージチェンジにもなる。

それはともかく、諸学問を専攻とする学芸員の配置によって、総合的な調査研究と学門情報が入手できるようになったことは大きな進展と言えらるだろうし、相互の交流が深められることによって資質の向上にもなる。

私の在住する日高管内においても民俗学、植物学、動物学、昆虫学、考古学などを主とする学芸員が配置されていることから容易に理解され



るところである。

生涯学習時代の重要性が叫ばれている今日、単に資料の収集、展示を職員が担当するのみではなく、市民ボランティアの養成と活用にも目を向けながら博物館活動を理解させていくことも必要となっている。そして学校や社会教育施設との連携によって、より以上の相乗効果上げ人づくり、町づくりに貢献するだろうと考えているこの頃である。

最後になりましたが部会役員の方々に日頃の御礼を述べて感想を終えたいと思います。新冠町教育委員会主査

乾 芳宏

平成六年度道南ブロック 学芸員等会議に参加して

ガイドマップによるところの「追分流れるロマンの町」江差町文化会館において、十一月十七日・十八日の両日にわたり平成六年度道南ブロック学芸員等会議が開催されました。滝川から参加してもよ

いだろうかと思しきところ、事務局から快く承諾いただき、会議に「かてて」いただき、会談に「かてて」いただきました。

第一日目、北海道大学農学部教授五十嵐恒雄氏を講師として「北海道の植生―道南地方―」と題しての講演が最初に行なわれました。「暖かさの指数だけでいけば、北海道では根室を除く全地域に分布するはずのブナがなぜ黒松内低地帯に分布域が限られているのか」で始まった講演は、森林植物帯からみた北海道の位置づけについて、そして道南の森林の特徴であるブナ林の森林群落についてをスライド

を交えながら進められていきました。特に、森林社会学に関する内容は大変興味深く今までは見ていなかったけれど、森は見えていなかったことを痛感しました。

引き続き行なわれた研究協議では、「博物館における自然学習の在り方」をテーマに、北海道開拓記念館企画調整課長三野紀雄氏より「歴史博物館における自然学習」と題して北海道開拓記念館での事例が発表されました。郷土の自然を学ぶ一般的な自然学習と、歴史博物館の特徴をいかに人間と自然との関わりを学ぶための自然学習を実践する中で、自然保護と文化財保護とをどのように整理していくかがあげられていました。生活用具の技術伝承の講座で、樹皮やつるを採取した際「講座で自然破壊をするのか」と指摘された事例発表には、私自

身考えるところが多くありました。直接の指摘はなかったにせよ、誤解をまねくようなことはなかったか、採取がともなう場合にはその場所や量が適切かどうか、と同時にその採取が必要かどうか十分検討し、参加者に疑問をもたれることのない講座の展開が自然学習を実施する上で大切であることを再認識しました。

続いて、黒松内町ブナセンター、滝川市美術自然史館、



北大農学部五十嵐恒雄教授講演会

知内町郷土資料館、市立函館博物館、今金町教育委員会から、現在実施している自然学習についての報告がありました。参加者の構成内容、募集方法、そして活動の手法について、それぞれ違いはあったものの共通して見えるのは、地域の自然、あるいは自然に関わるさまざまなを、参加者とともにじっくり見ていこうとする姿勢です。講座の参加がきっかけとなり、住民が博物館の調査活動にも積極的に関わっていく、一過性ではない講座の運営をめざしているのですが、今回の各館からの事例発表はたくさんヒントを与えてくれました。

翌日、施設見学が実施されたのですが、私は会議開始前に見学しました。「江差の五月は江戸にもない」北前船の終点である江差の繁栄をこううたったそうです。現在保存され公開されている文化財を訪ねると、そのにぎわいが伝わってくるような気がしました。国の重要文化財に指定されている中村家を訪ねたとき、そ

こで案内されている女性の対応が余計そんな気にさせたのかも知れませ。解説のうまさはもちろんですが、来館者への気づかい（「こちらに来てスリーブにあたりませんか」のことばが、冷たい風にあたって冷えていた体をより暖かくしてくれました。）まちの文化財に対しての誇りが、江差町の文化普及を大きく支えていました。人のかかわりかたが文化財の保存を左右する。自分のおかれている立場の重さをひしと感じ、中村家を後にしました。

年報などの印刷物で活動内容を知らせる機会がありますが、研修会で博物館関係者の方々に実際に会いしでの情報交換は、より具体的に知ることができ私にとってはありがたい時間です。最後に、会議の運営にあたられた事務局の方々、そして貴重な情報を与えて下さった参加者のみなさんにお礼申し上げ、私の感想とさせていただきます。

滝川市美術自然史館

北海道の博物館

北海道立社会教育総合センター

廣瀬隆人

これまでいくつかの「北海道の博物館の現状」に関する報告が出されているが、残念なことに博物館数を具体的に提示した報告は極めて少なく例え数が提示されていても大きな制約が施され、実態とは異なる内容であることが多く見られた。

そこで、数年前から折を見て各種の文献を参考として可能なかぎり北海道の博物館等展示施設数を調査した結果、一九九四年十二月一日現在で一、二〇〇館を超える数となった。

そこで、①どのような数え方をしたのか。②どのような方法で調べたのか。③どのような傾向にあるのかなどを紙幅の許す限り整理しておくことにしたい。

一 教え方について

これは何をもち「博物館及びその仲間」とするのかというところに深くかわるが、

基本的な考え方としてできる限り広くとらえ、次のように範囲を設定した。

・展示施設をもっていること
・公開していること（日数や時間の長短は問わない）

こうした広い範囲を設定した結果次のような施設をも含むることとした。一般の博物館や郷土資料館、水族館、植

物園、美術館のほか、樹木園、ピクニックセンター、標本室、

学校郷土資料室、天文台、天体観測室、プラネタリウム、

交通・鉄道記念館、森林学習展示館、常設展示のギャラリー

・文化財施設（旧家、寺社、屯田兵屋など）公園や遊園地にある小動物園や鹿園、昆虫の家として公開展示している個人コレクションなどを情報収集し得る限り数えた結果としての一、二〇〇館である。

すなわち疑わしきは「博物館」ということにした。

しかし、全てを自分の目で

確認することは物理的に困難であり、しばしば植物園とある名称の造園会社や水族館という名称の活魚店に遭遇することになった。

この他、博物館に附属する植物園や動物園は別に数えることにした。

二 調査の方法

調査は基本的には文献によった。ここでは特に文献名をあげないが、観光関係の文献や文学、鉄道、森林、生涯学習など関係の専門誌を中心とした。更に丹青総合研究所の「ミュージアム・データ」や印刷会社の情報誌「アイ・ワード」や行政機関の発行する

広報紙誌、観光団体の機関紙、市町村の広報紙、それと新聞各紙の地域版、地方紙、地域のミニコミ誌、各市町村の要覧、各市町村教育委員会の発行する施設ガイドやマップ等を参考とした。こうした情報を手まめにメモしていく作業を継続した。

更に、重要な情報源は、多くの友人知人からの情報提供であった。孤独な作業を励ましてくれる仲間からの情報が

なければ調査は継続不可能である。さて、調査した文献は主なもの五〇冊、雑誌は主なもの十種程度である。

三 北海道の博物館等展示施設の傾向

こうして一、二〇〇余館の名称、住所、設置者、電話番号、設置年、簡単な概要などを調査し、一覧表として整理した。更に各館の調査研究紀要や啓発書などの印刷物や事業概要をみるとおおよそ次のような傾向がみられることがわかった。

①歴史中心から、美術を中心とする芸術文化と自然の価値を問う直す環境教育の視点を持つ施設へ

②総合的施設から個性的施設の新設へ

③観覧中心から「触れる・作る・使う」の参加・体験の事業構成へ

④自然や文化財の保護中心から活用による保護思想の普及へ（特に森林学習施設や埋蔵文化財施設）

⑤「楽しい・面白い」から知的好奇心（学習）の高揚へ

⑥企業や行政の広報手段の博物館化（広報媒体としての展示）

⑦学芸員を核とした「知的なるもの」によるまちづくり

⑧鉄道の廃止に伴う交通・鉄道記念施設の増加

⑨ビジュアルな解説書やカラー版の読みやすい啓発書の発行

⑩個人コレクションの公開個人博物館の設立増加とその公共性の高まり

まとめ この他、博物館数に比べて専任職員や学芸員の数が著しく少ないことなど多くの問題を抱えているが、取り敢えず数だけからわかることはこの程度であった。教え方や調査の方法などには異論もあるかと思う。一人の人間が行う作業としてあまりに膨大な量感がある。誠に不十分なものではあるが、仲間からのすすめもあり、近日中に「北海道博物館等資料集」（仮題）として発行予定である。

館・園紹介

江別市セラミックアートセンター

江別市セラミックアートセンターは、「れんがとやきもの」をキーワードとして、江別市がすすめている「陶芸の里」計画の中核施設として一九九四年十一月十九日にオープンしました。

江別市は太古の昔から、やきものに深い関わりがあり、縄文時代には江別式土器文化がここを中心に全道に拡がりました。また、れんが産業におきましては、明治時代にはじまり、今日までの百有余年間にわたり、当市の代表的



な地場産業であります。

また、本道陶芸の先駆的存在である小森忍がこの地を晩年の活動の場としました。

建物は野幌原始林を背景に、外観は、緑色の三角屋根と江別産の羊かんれんがが十七万枚積まれた、モダンな造りです。

一階ロビーと二階へのコンコースには、世界的に著名な陶芸家、會田雄亮氏のデザインによる陶板レリーフとれんがアートワークが施され、建物自体も芸術性を醸しだしています。

センター内は、常設展示室（「北のやきもの展示室」「れんが資料展示室」）・企画展示室・研修室・図書室・教室工房・レンタル工房・カフェラウンジ・事務室・会議室・研究室・収蔵庫・第二収蔵庫などからなっています。

「北のやきもの展示室」には、小森忍記念室を設け、日本における釉薬研究の第一人

者である、小森氏の業績を改めて世に問うべく、氏の作品と関係資料を、氏が活動した四つの地域ごとに分けて合計一二一点を展示しています。

さらに、現在、北海道で活動されている代表的な陶芸家の作品六十九組を展示しています。展示作品には北海道らしく伝統に縛られない自由な作風がうかがえます。

「れんが資料展示室」では、道内のれんが産業の歴史を理解してもらうために、れんがなどの窯業製品を一五三点、窯業用具を三十点展示し、さらに登り窯のシオラマ、循環窯の模型、映像コーナーとして「れんがシアター」などがあります。

またニューセラミックスの資料として、スペースシャトルに使用している耐熱タイルなども展示しています。

以上の展示部門の他に、当施設では、体験・教育普及部門として、センター等が主催する陶芸教室等の「教室工房」と自由に作陶活動が行える「レンタル工房」があり、



広く開放しています。

事業内容としましては、やきものに関する企画展示、陶芸教室、講演会、ワークショップ、セミナー、交流会等を予定しています。

展示を見ていただくだけではなく、工房での作陶や、図書室・研修室における情報収集・交流を通して、多方面から「やきもの」を見て・感じて・触れて・学び・楽しめる施設を目指していきたいと思っています。

●江別市セラミックアートセンター案内

開館時間
午前九時から午後九時まで

（ただし、常設展示は午前九時三〇分から午後五時まで）

休館日

月曜日、祝日の翌日、十二月二十九日から一月三日まで

観覧料

高校生以上三〇〇円（二四〇円）、小・中学生一五〇円（二〇〇円）、カッコ内は、団体二十名以上

満六十五歳以上、身障者手帳受給者は無料

交通案内

車で札幌から国道一二号經由で四〇分

JRで野幌駅下車JRバス乗換ラグビー場前下車、所要時間は三十分

JRバスで新札幌駅発（野幌運動公園線）ラグビー場前下車、所要時間は三十分

お問い合わせ先

〒〇六九 江別市西野幌二一四一五

TEL〇一一三三五一一〇〇四

FAX〇一一三三五一一〇〇〇

セラミックアートセンター

学芸員 兼平 一志

館・園紹介

木田金次郎の宇宙

— 木田金次郎美術館

「名作のモデル、私はこう見られがちである。どうも性海が、空が、十二分に解け合っていない。」

晩年、そう語った木田の言葉の裏に、それまでの生涯の苦闘の歴史を感じる事ができる。おそらく最も多感だった十七歳の時点で有島武郎と出会った。その後の十三年に巨る交流は、郷土の自然を師とするという最大の教示を残し有島の死をもって終わった。岩内での画家としての生涯はそこから始まったのだが、六十歳で初の個展を開くまでの三十年は、ただ、描き続けるしかない、胎動の期間であった。有島によって見いだされた画家は、その絆と、絆によって生み出された「モデル」という逆説的な宿命の狭間に煩悶し続けた。

六十一歳の宿命、岩内町大火により過去の仕事を全て焼かれた時、やっと「ほんとう



地面から吹き上げる塩まじりの雪、そんな冬を抜け出して、一気に爆発する夏の祭り。激しく、多彩な木田の画面は、岩内の風物を象徴して、現在も全く新しい。「木田金次郎」は、そうして岩内を象徴する抽象名詞になってしまった。後志という圏域には、既にこうした抽象名詞が密集している。まさに芸術の代名詞であるピカソの荒井記念美術館、木田を生んだ岩内の「郷土」館、ニセコの農地を解放した「有島」の記念館、泊村の過去と未来をみつめる「とまりん」館、これら先輩諸氏の施設は、木田金次郎の世界を再現していく作業のなかでも、決して欠かせないモニューメントである。ネットワークという、ちょっと正体の見えにくいことばより、地域が「一九」となって風土を伝えていくという姿勢で語るほうが木田金次郎の宇宙のなかでは相応しいように思う。今後の活動は、木田がまさしくそうであったように、この宇宙から世界を見続けていけるものにして

きたい。

開館にいたるまで数多くの御助言をいただいた先輩の方々に、言い尽くせない感謝と、そしてこれからの御支援を再び懇願して、未だ開館の余韻の冷めやらぬ岩内からのメッセージといたします。

〈追記・開館後の顛末〉

人—十二月三十日現在、一六、六一五人（四日間の無料期間の一〇、四二一人を含んでいます。）

温度—三日の開館後一時間の時点、館内温度は三〇度近くまでいってしまいました。学芸員の焦りは、ひとかたならぬものでした。空調が思わしくありません。

ジ業務が主な仕事ですが、講座・研修を続けて、将来は、資料関係の整理から作品解説まで、幅広く活躍していただくつもりです。

木田金次郎美術館案内

場所/住所 北海道岩内郡岩内町字万代五十一番地の三

※岩内町市街地の中心に位置する旧国鉄跡地

開館時間/午前十時から午後六時まで（入館は五時三〇分まで）

休館日/月曜日（但し、祝日にあたる場合はその翌日）

年末年始（十二月三十一日から一月五日）

観覧料/

個人 団体(十名以上)

一般 五〇〇円 四〇〇円

高校生 二〇〇円 一五〇円

小中学生 一〇〇円 八〇円

お問い合わせ先/〒〇四五

岩内郡岩内町万代五十一—三

TEL 〇一三五—六三—二二

二一

FAX 〇一三五—六三—二二

八八

木田金次郎美術館

学芸員 久米 淳之

各種研修会

の開催

一、第三〇回北海道青少年科学館職員研修会

第三〇回の北海道青少年科学館職員の研修会は十月の六日、七日の両日、稚内市青少年科学館を会場に、旭川市青少年科学館、厚岸町海事記念館、岩見沢市郷土館、帯広市科学館、小樽市青少年科学館、釧路市青少年科学館、札幌市青少年科学館、千歳市民文化センター、北網走北見文化センター、室蘭市青少年科学館、苫小牧市科学センターと稚内市教育委員会ならびに稚内市青少年科学館の職員等二三名が会場の稚内市青少年科学館に参集して開かれました。

十時からの開会式・オリエンテーションのあと、実技研修として、八色バトルサウンドの製作を、昼食をはさんで午後二時まで行ないました。

この研修は、夏休みのサマースクール事業として稚内市内の小学校五、六年生を対象に実施したのを契機に、近年、



察を行ない散会しました。

〈付記〉八色バトルサウンドとは、八種類の効果音が選べるICモジュールキットのことです。いずれもストレス解消や気分転換に適した刺激的なサウンドで、プラモデルや玩具に組み込めば効果抜群です。

稚内市青少年科学館
主任 伊林 仁

二、平成六年度秋期飼育技術者技術研究会

平成六年度の日本動物園水族館協会北海道ブロック秋季研修会が十月二十五日、二十六日の両日ホテルオホーツク荘で十九名の関係職員を集めて盛會裡に開催されました。

以下、そのプログラムを紹介いたします。

一、トナカイの人工保育について

札幌市円山動物園
本間 耕

二、小樽水族館に於けるバンドウイルカの飼育と環境について

小樽水族館公社

折笠 光希子
三、飼育下におけるオオハクチョウ三世の繁殖報告

久保 廣行
四、のほりべつクマ牧場の飼料変化について

佐々木 和好
五、オスゾウの急死によるメスゾウの行動と飼育経過

井上 健二
六、シベリアチョウザメとカラチョウザメの飼育と成長について

清水 大地
七、フタコブラクダのペアリングについて

旭川動物園
深坂 勉

八、インドゾウ(花子)の下部痲痺状とその治療等について経過報告

札幌市円山動物園
廣川 幸男

九、一九八〇年から一九九四年までに補獲されたボウズギンポについて

明河 淳
十、シマウマのおり取り方法について

おびひろ動物園
相内 博

十一、キタオットセイの飼育経過について

市立室蘭水族館
市立室蘭水族館

十三、のほりべつクマ牧場における牧場解説(ガイド)の状況について

のほりべつクマ牧場
坂元 秀行

広尾海洋水族科学館

石丸 秀紀
十、ラッコ成獣(♀)の交尾行動による急変とその後の処置、治療経過について、No. II

小関 光雄
オホーツク水族館

十一、シマウマのおり取り方法について

おびひろ動物園

十二、キタオットセイの飼育経過について

市立室蘭水族館

十三、のほりべつクマ牧場における牧場解説(ガイド)の状況について

のほりべつクマ牧場

坂元 秀行

事務局通信

11・8(火) 道博協の望ましいあり方の検討会

11・14(月) 中川敏元道博協会長勲五等瑞宝賞受賞

12・1(木) 平成六年第二回役員会(於 苫小牧)